

千葉

## 懇切丁寧な相談 楽しく分かりやすいセミナー

千葉産業保健総合支援センター 産業保健相談員 但馬 明雄

### 千葉県のイメージは？ 農業県・工業県

千葉県は首都圏の東側に位置して房総半島とも呼ばれますが、実は四方を水（海：太平洋と東京湾、川：利根川と江戸川）に囲まれた“島”です。みなさまの千葉県のイメージはいかがでしょう？

季節の話題として報道されることも多い、銚子の漁港、南房総のお花畑、成田の国際空港・寺院、浦安のテーマパークなどを思い浮かべて、農業・水産業、観光のイメージをお持ちの方が多いようです。

意外と知られていませんが、製鉄所、発電所、石油化学コンビナート、食品製造コンビナートなどの大規模製造業も多く、製造品出荷額も全国上位です。一方で東京のベッドタウンとして人口増加もあり、大型商業施設も多く、商品販売額も全国上位です。

このように千葉県はさまざまな業種・施設もあり、多様な働き方のある県です。

### 産業保健活動の先進県

事業場の専属産業医・産業保健スタッフ、千葉大学医学部・千葉労災病院等の産業保健関係者による産業保健活動が古くから盛んに行われており、平成6年には「労働福祉事業団 千葉産業保健推進センター」が千葉市に設置されました。

当時の様子はこの情報誌『産業保健21』創刊号（1995年7月）の「センターだより」にトップバッターとして掲載されています。これによると“推進センターPR元年”と位置付け、ポスターを県内200カ所の駅に掲示、リーフレットや「利用のしおり」などの資料を従業員50人以上の全事業場と嘱託産業医に配布、全国初の千葉県快適職場・産業保健推進大会の開催、各種研修会（基礎カウンセリング実践講座、産業看護実践講座、若手産業医カンファレンスの会）開催など「攻めの姿勢」が伺われます。

### 千葉さんぽセンターのサービス

現在は「独立行政法人労働者健康安全機構 千葉産業保健総合支援センター」に名称が変わりましたが、所長以下職員9名、非常勤の産業保健相談員15名で窓口・電話・メールなどでの相談対応のほか、各種セミナーの開催、理学療法士などの専門家による「転倒防止・腰痛予防のための職場訪問サービス」、産業保健ハンドブック（千葉版）の配布なども行っています。



「転倒防止・腰痛予防のための職場訪問サービス」、産業保健ハンドブック（千葉版）の配布なども行っています。

### 産業保健相談員として心がけていること

私は労働局・労働基準監督署に勤務していたこともあり、センターの設立当初からお世話になっていましたが、数年前から産業保健相談員として労働衛生関係法令の相談、セミナーを受け持っています。

相談では、行政勤務時にはなかったような、法令・通達に記載されていない具体的な対処方法に関するものもあり、相談者とともに考え、ハンドブック、リーフレットなどの活用や独自資料を作成するなどにより、懇切丁寧な対応を心がけています。

セミナーでは、クイズを取り入れ、関係するパンフレット・書籍を展示するなど楽しく分かりやすい説明を心がけて、会場とWEBのダブル開催も行っています。

どうぞお気軽にご利用ください。



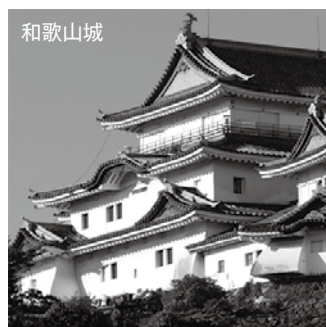
# 地域に寄り添う産業保健活動のかたち —対話から始まる和歌山モデル—

和歌山産業保健総合支援センター 産業保健相談員 石井 正美

私は、和歌山産業保健総合支援センターにおいて、メンタルヘルスを中心とした相談対応や事業場担当者への支援、研修の企画・実施に携わっています。日々の相談では、事業主や人事担当者、管理職の方々から、人間関係や対応の難しさ、心の不調を抱える方への関わり方などについてお話を伺っています。

カウンセリングで大切にしているのは、「正しい対応を伝えること」だけでなく、その背景にある思いや状況を丁寧に聴き取り、ともに整理していくことです。言葉にならない迷いや戸惑いも含めて受け止めながら、現場で無理なく実践できる関わり方を一緒に見つけていくことを心がけています。

和歌山県では高齢化が進み、働き盛り世代の減少が課題となるなか、働く一人ひとりの健康を守ることは地域の活力維持に不可欠です。しかし現場では、業務の忙しさからセルフケアが後回しになり、メンタルヘルス不調につながるケースも少なくありません。特に小規模事業場では産業医が選任されていない場合も多く、「どこに相談すればよいか分からない」という声も聞かれます。



当センターでは、こうした課題に対し、身体と心の両面から働く人を支えるとともに、「安心して話せる場」を起点とした支援の充実に取り組んでいます。

## 地理的要因による体制の格差を克服

和歌山県は南北に長く、紀南地方などでは専門機関への相談が難しい場合があります。この課題に対し、オンライン相談や出張相談を活用し、地域に左右されない支援体制の構築を進めています。

また、研修参加者へのアンケートや意見交換を通じ



てニーズを把握し、翌年度の内容に反映しています。近年は対面研修においても、講義に加え事例検討やグループワークを取り入れ、実践的で参加者同士の距離が近い学びの場づくりを行っています。

## 地域の産業保健活動だからできること

当センターとの関わりは今年で8年目になります。私自身、経営者として現場に立っていた経験から、「社員に元気に働いてほしい」「よい職場をつくりたい」という思いに強く共感しています。

しかし現場では、その思いがあっても教育やコミュニケーションに悩まれている姿を多く見てきました。産業保健活動というとセミナーをイメージされがちですが、私たちが重視しているのは、その前段階にある担当者との対話です。

まず現場の声を丁寧に聴き、「どこに本当の課題があるのか」をともに整理します。そのうえで、管理職の関わり方や声かけ、相談しやすい雰囲気づくりなど、現場で実践できる形で支援していきます。

その一歩は、研修会場での何気ない相談から始まることもあれば、ミカン畑での立ち話のなかで生まれることもあります。また、「さんぽセンター」での関わりの中にあることもあります。

こうした積み重ねが職場の安心感につながる—私たちは、そのプロセスを何より大切にしています。